

残念無念集

1 両側から

両側から伸びた二本の藤は藤棚の上でからみあひ
たくさんの花をゆらせてゐた
「藤棚の下砂ほこり舞ひ上る」といふ句をつくつた時には
僕は自分を立てなほして去ることが出来た
山の中を見ることをこぼんだ女
僕が強情に山にのしあがつても
にくらしさうに僕を投げとばした女
暈の上に血痕だけが散つた
何年かたつてここに来てみると
夜なのにここはずゐぶん明るい
松の木の下の笹のあひだに坐つて眺めた藤棚には
片方から蔓だけが手のやうに棚にしがみついてゐる
一本の藤は枯れて切られたのだ
あちらの水銀燈の真下では男女が立つたまま抱きあひ
さつきから長い時間動かない
自分の青春が ああいふ風にではなく
もつと曲折があり羞恥にみちたものであつたことを考へる
煙草に火をつけて 彼等を見てゐると
いろいろなことがわかつてくる
僕の中の何ものかも もはや切られてなくなつてゐる
燃えるべき火もなくなつてゐる

2 彼は石である

彼は石である 彼の目に生气はない
彼は四つ這ひになつて 首をあげてゐる
石である場合 口が 言葉を発するか
言葉がうなりをたてて 僕の胸を打つか
彼が固定されてゐる台座に向ひ 彼の方に両手をひろげ
僕は広場の砂利の上を歩く
自分の動く影 存在するものは石と僕と
石の彼の影と彼 歩く僕の影と僕
彼の背中に照る日の光
彼は負けたのか 彼は戦つたのか 彼はこれからも戦ふのか

台座の上の彼は四つ這ひ
僕は彼のやうに両膝を曲げて砂利に両膝をつける
両手を砂利につける 僕は彼と同じ悲惨な思ひをする
僕は彼のやうに絶望を感じ 僕は台座の上にもるのを知る
お前は負けたのか お前は戦つたのか お前はこれからも戦ふのか
彼よ 影よ 影よ 僕が四つ這ひである場合
ここに二つの石像がならぶことになるのか

3 円柱の

円柱の並んだすき間から見える壁のしつくひは
コンクリートのひび割れを埋めるためにぬりたくつたものだが
図形はさまざまに変化してホームの両側に長くつづいてゐる
一九六六年十一月十日の地下鉄霞ヶ関のホーム
円柱のあひだを歩いてすぎて行く男女のうしろ姿
よりそつて時には手をつないで時間をかけて彼等は歩いてゐる
電車がつくたびに 円柱のあひだから黒い人影が現はれるが
二人の歩みは乱されることもない
彼等もみなくなつて もう誰もゐないホームの外れで
俺だけが素晴らしい壁画をつくづくと見た
この前ここに来たのは国会議事堂前のデモのあとだつた
共産党系は請願デモをした
社青同の学生たちは投石をして警官隊とにらみあつた
三百人の学生の両側から黒い洋服の警官がはさみこんでしめつけた
デモ隊が走ると両側の警官の列は走り出し警官隊の層は厚くなつた
雨がふつてゐるのではない 空には星が見えた
雨がふつてゐるやうに むんむんしてゐた
月が照つてゐるのではない 月が照つてゐるやうであつた
しづかになつた瞬間のあとに
「第三分隊何をしてゐるか うしろ うしろ」
警官の帽子の前のプラスチックの透明マスクは
ピカピカと波の押し寄せるやうに光つた
鼠のやうな乱闘服の男たちの肉体
ズックの運動靴の片方が空に投げられた
その場所が戦場のやうに思へた
戦争の練習をしてゐるのかしらと思つた
熱気を感じ 学生三百人に警官五千人を見たあと
熱気のやり場に困つてこのホームを歩いたことがあつた
俺がしつくひの図形を見てゐるのは

あの時のやうに熱気のやり場に困つてゐるからだ
俺の怒りに 俺が ひび割れねばよいが
ひび割れるのも また よいのか